

震災後の子どもたち(15)

あめときめ……

震災からもうすぐ二年がやってきました。フリースクールの教室も自宅も全壊、神戸市内から通う生徒が多かったから、生徒の家も全壊ないし半壊の被害を被り、しばらくは連絡のとれない日が続きました。教室や自宅の移転先が決まらないまま私たち家族は柱の傾いた家にしばらく住み続けました。余震のたびに柱や壁がずれていく恐怖を感じ



田辺 克之

じ、雨がふれば傘をさしてトイレに入るような不自由な生活が半年ちかく続きました。

震災によって学校が避難所になり、教師と生徒や地域の人々が協力しあって、水を運んだり、焚き出しをしたり、配給を手伝う姿が連日テレビで報道されるようになり、一か月もしないうちに、「学校に笑顔がもどった」などと安否確認のた

めに登校した生徒と教師が抱き合うシーンが報じられるようになりました。管理教育、偏差値教育の中で見失いがちだった「いのちの大切さ」をこの震災で学ぶことができたと言語教師の映像などを見ながら、僕はこれで学校もずいぶん行きやすくなるやろな、とぼんやり考え、不登校も減るかもしれん、いじめもなくなるかも、と考えていくうちに、フリースクールやめても大丈夫やろ、という気持ちになりました。

しかし、避難所に移って連絡の途絶えていた生徒の親から「避難所にいると、逃げ場がなくて、不登校の娘がノイローゼのようになって入院しました」という連絡が入りました。電話が開通し、鉄道が回復してくると、子どもたちがフリースクールに集まりはじめました。僕の予想に反して、学校にもどった生徒はいませんでした。急ぎょフリースクールの再開準備を開始。全国のフリースクールやネットワークの人々から応援の手

紙とカンパが送られてきました。チャリティーコンサートを開催してくれるグループや街頭カンパを申し出てくれるグループなどもあり、たくさんの人々から「阪神にかぞえるほどじゃないフリースクールを絶対つぶしたらあかん」というメッセージが届きました。不動産屋を何軒もまわって教室になりそうな場所をさがしました。くる日もくる日も家探しをしました。やっとビルの一室を借りることができ、地域の方々のご好意で間借りしていた部屋からビルに移り、活動を再開することができました。これまで本当に胸が熱くなるような体験をいっぱい頂いて、どうにか二年間フリースクールの活動を続けることができました。

震災直後は、「いのちの大切さ」が確認され、これまで歪んだ教育体制が大きくゆさぶられたように感じられたのですが、それはほんの束の間の出来事でした。「いじめ」で自殺する子どもがあ

とを立たず、あいかわらず教師の暴力が続き、「いじめ、自殺、不登校一〇番」の相談電話は鳴りつづけました。震災によって、兵庫県は大きなダメージを受けましたが、二年間で表面的にはずいぶん復興してきています。傷んだ校舎も修復され、学校もほぼ建物は元通りになり、そして管理教育も復元されたのです。「学校なんてかたんに変わるわけないやん」と子どもたちの方が冷静でした。

今年一月八日、須磨の踏切で高校生の石坂さゆりさんが、快速電車に飛び込んで自殺しました。「私が死んだら、もういじめないで」という遺書を残して亡くなりました。また先月神戸市内でも姫路でも小学生が自殺しています。学校も息苦しさはいっこうに変わっていません。これで学校も変わるかもしれない、とのんびり考えた自分の浅はかさが恥ずかしくなりません。震災という未曾有の被害を出した体験から、これといった教

訓も学びえず、社会を逆戻りさせてしまった大人の責任を強く感じます。フリースクールの灯が消えそうになった今年の春、僕は兵庫県庁に行き、公費助成の申し入れをしましたが、認められず、ふと帰り道、県庁玄関前の階段の上で、「もう灯油でもかぶって線香になるしかないか」と真剣に悩みました。しかしその時も全国各地から再建募金が寄せられ、窮地を脱することができました。「明石フリースクール冬夏舎の灯が消える」と聞きつけた卒業生たちが集まり、再建のための会議が開かれました。「フリースクールがなくなったら、俺らどこへ行けばいいんや？」と訴える卒業生たちの目は真剣でした。

九六年四月からは、高校中退生及び不登校生の学習をサポートするために「明石高等学院」を開設し、通信高校に通う人たち、定時制に通う人、また大検をめざす人たちのために、マンツーマン指導できる体制をスタートさせました。みんな好

きな時間に出席して、好きな学科を学習しています。たんに教科の学習だけではなく、いろいろな行事やイベントを生徒とスタッフが共同で計画し、広島へ自転車で五日間かけて走る「ピースラン」や日本海まで一週間かけて歩く「子午線Walk」など大きな冒険にも挑戦しています。

学校へ行けないことが、まるでズルいことをしているように考えて、自分を責め、昼間は一步も外へ出られない「とじこもり」の青少年が増えていきます。学校という集団になじめなくても、学校に適應できなくても、十分個性的に生きていくことができるし、自分で仕事も見つけ社会に適應しているたくさん先輩がいることに気づいてほしいと思います。「みんなといっしょ」でなくてもいいはずです。そんなことで罪悪感をもったり自分をいじめたりしないで、だいじなだいじな一度しかない青春なんだから、せっかく学校からとりもどした自分の時間をしまさないで、どうするの



▲「ピースラン風96」

でしょう。フリースクールに来ている子どもたちは平気で不登校し、不登校をむしろ楽しんでいきます。そしてゆっくり自分にあった生き方を見つけ



▶広島県三原市小佐木島にあった「風の子学園」(フリースクール)の跡地で追悼集会を毎年行っている。コンテナがあった場所て代表が追悼文を読む。

ていこうとしています。それはけっして大人から押しつけられたものではなく、悩んだ末、自分で切り開いた道です。学歴や偏差値のレールからはすこしはずれているけれど、だれも通らない道だから、つらくてもやりがいがある、と答えてくれた卒業生がいます。

震災から二年、フリースクールの活動もやっと以前の状態にもどってきました。学校以外のもう一つの「学びの場」としてのフリースクールが、各地に誕生すればいいのにと願っています。そして子どもたちの選択肢をふやす、それが子ども個性、多様性を認めることになるだろうし、そのためにも社会はもっと努力しなければならぬだろうと思います。

(明石フリースクール冬夏舎・明石高等学院)